『日本アジア研究』第 19 号（2022 年 3 月）

文学作品における「～タロウ」と「～タダロウ」の使用傾向とその背景
――「～タロウ」名詞系文に注目して――

李兮然*

本稿は，BCCWJ を用いて文学作品における過去推量形式「～タロウ」と「～タダロウ」を比較した李（2020）の研究成果に基づき，名詞系文においては「～タロウ」の使用が顕著であることについて改めて確認した上で，その傾向の背後の理由について下記仮説①～③を立てて説明した．

仮説①　歯茎破裂音による影響
歯茎破裂音によって発音の難しい「だ」が挿入される名詞系文の中から，比較的発音しやすい「～だったろう」のほうが選ばれる．

仮説②　「ある」が前接する「～タロウ」動詞系文による影響
拮抗傾向を呈している「ある」の前接する「～タロウ」動詞系文が，「～タロウ」名詞系文「～であったろう」の使用傾向に影響を及ぼした．

仮説③　非過去推量形式「～であろう」の使用分布による影響
非過去推量形式における「～であろう」の使用分布が，過去推量形式における名詞系文「～であったろう」の使用分布と類似しており，両形式が互いに影響を与え合っている．

キーワード：推量形式，「～タロウ」，名詞系文，使用傾向

1．はじめに

過去の出来事について推量する際，例（1）のように「～タダロウ」を用いる場合もあれば，例（2）のように「～タロウ」を用いる場合もある．本稿は，この二種類の過去推量形式の使用実態を比較した李（2020）の調査結果を踏まえ，名詞系文においては「～タロウ」の使用が顕著であることを改めて確認した上で，その傾向の背後の理由について考察するものである．

(1)あれから四十分は<u>経過しただろう</u>．私の意識のなかを数字が，いくつも横切る．[1]
（OB1X_00302『エーゲ海に捧ぐ 池田満寿夫第一小説集』）

* り・けいぜん，埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程

[1] 本稿の例文は全て現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）から引用したものである．下線部は筆者が引いたものである．

(2) 昨日ハンズで，左和子はたしかに，以前に使っていたものをくれると言った．あのとき間宮も一緒だったから，話ぐらいは聞いていたろう．

（PB29_00014『ともだち』）

なお，先行研究に関して，推量形式を対象とした先行研究が数多く存在するが，本稿の内容である過去推量形式の使用傾向に注目しているものは見当たらず，考察が望まれると思われる。

次の第 2 節ではまず，李（2020）について簡潔に紹介する．そのうえで，名詞系文に分類される文の類型，及び「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の使用傾向について，李（2020）を引用しながら改めて整理する．そして第 3 節では「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の使用傾向，つまり名詞系文においては「～タロウ」の使用が顕著であることに対して，仮説①～③を立て説明していく．最後に，第 4 節で本稿を通して得られた結論をまとめた上で今後の課題を提起する．

2. 名詞系文について

本節は過去推量形式「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の種類及び使用傾向を整理する．それに先立って，「～タロウ」「～タダロウ」の使用傾向について調査した李（2020）について簡潔に紹介しておきたい．

2.1 李（2020）について

李（2020）は，「～タロウ」と「～タダロウ」の使用実態を明らかにすることを研究目的として，現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を用いて，文学作品における用例の使用実態を分析した．用例は検索アプリケーション『中納言』の短単位検索で抽出している[2]．文学作品における用例を抽出するため，検索対象は下記の 4 つに絞っている．

検索対象
出版・雑誌　教育・学芸（文学／芸術）
出版・書籍　9 文学
図書館・書籍　9 文学
特定目的・ベストセラー　9 文学

その結果，抽出された用例数（「文学全体」）及び分析対象となる用例数は下記で示している．

---

[2] 「～タロウ」の抽出方法：「キー」指定しない、「後方共起 1 キーから 1 語」語彙素：た＋品詞：大分類：助動詞＋活用形：大分類：意志推量形。
「～タダロウ」の抽出方法：「キー」指定しない、「後方共起 1 キーから 1 語」語彙素：た＋品詞：大分類：助動詞＋活用形：大分類：終止形、「後方共起 2 キーから 2 語」語彙素：だ＋品詞：大分類：助動詞＋活用形：大分類：意志推量形。

表 1　BCCWJ の文学作品における「～タロウ」「～タダロウ」の用例数[3]

	～タロウ		～タダロウ	
	用例数	選好率[4]	用例数	選好率
文学全体	1308	43%	1716	57%
分析対象	856	49%	894	51%

（李 2020:18 表 3）[5]

李（2020）では，推量形式に前接する語の品詞，いわゆる「前接語品詞」によって「～タロウ」と「～タダロウ」の使用傾向に違いがあることを明らかにし，下記の「結論Ⅰ」をまとめた．

結論Ⅰ　前接語品詞について

〈動詞型〉　「～タロウ」＜[6]「～タダロウ」

〈名詞型〉　「名詞」との間に「である」「だ」のいずれを挿入しても，「～タロウ」＞「～タダロウ」

〈イ形容詞型〉　使用上の傾向が見られなかった

（李 2020:21）

冒頭で説明したように，本稿は結論Ⅰのうち，「名詞系」[7]が前接する場合（以下，「名詞系文」と呼ぶ）に注目する．動詞系が前接する場合（以下，「動詞系文」と呼ぶ）「～タダロウ」の使用が優勢であることや，イ形容詞系が前接する場合（以下，「イ形容詞系文」と呼ぶ）両形式における使用が均衡であることも確認できるが，現代日本語において「～タダロウ」を使用するのが一般的であると考えられるため，本稿は前接語品詞のうち，使用傾向がいちばん顕著で特徴的な名詞系文に焦点を当てることにした．

李（2020）では上記のような使用傾向を指摘したものの，前接語品詞によって傾向が異なる理由についての考察は今後の課題としている．そこで本稿は上に挙げた「結論Ⅰ」のうち，名詞系文の使用傾向に注目して，仮説を立てることとした．

---

[3] 本稿の執筆にあたり，李（2020）の調査を改めて精査した結果，本稿の「分析対象」となる用例数は「～タロウ」が 846 例で，「～タダロウ」が 892 例となった．数値が李（2020）と僅かながら異なるためここに書き留めておく．

[4] 「選好率」とは 2 つ（以上）の表現を選択する際の傾向を示す数値のことである．例えば，表 1 における選好率は，同じ過去推量を表す際，「～タロウ」を選ぶか「～タダロウ」を選ぶかという使用傾向を示している．

[5] 表 1，表 3 は李（2020）より引用しているが，本稿での表示を統一するため，パーセンテージや表の様式などに調整を施している．

[6] 「＞」や「＜」は用例数を比較した結果を指している．例えばここでは，「動詞型」の場合「～タダロウ」の用例数が「～タロウ」より多いということを「～タロウ」＜「～タダロウ」で示している．

[7] 上に挙げたように李（2020）では「名詞型」を用いたが，本稿では引用の部分を除き「名詞系」に改める．同様に，「動詞型」「イ形容詞型」も「動詞系」「イ形容詞系」に改める．

2.2 「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の種類

本論に入る前に，ここでまず，李（2020）及び本稿で取り扱う「名詞系文」はどういった文のことを指しているのかについて，用例を挙げながら説明しておきたい．

(3) （「～であったろう」）
シェムリアップを離れて五日後にアンコールワットはクメール・ルージュに占領されたという情報があった．恐らく千九百七十年にアンコールワットを訪れた外国人は私が最後であったろうと思う．
（LBf9_00180『報道カメラマン』）

(4) （「～であっただろう」）
十三年も穿いた，と言うことであったが，その足袋は汚れてはいなかった．幾十回となく洗い晒したものであっただろうのに，汚れてはいなかった．
（OB2X_00190『生きて行く私 上』）

(5) （「～だったろう」）
母が父からよく手を上げられていて，逃げるとき着物をからげて，白いふくらはぎを出して庭に飛び下りたりしていた．そういう母の姿は，むしろ父があってこその光景だったろう．
（LBl9_00018『台所』）

(6) （「～だっただろう」）
「しかしドニ鈴木って男は，僕がこれまで出会った男の中で，一番ユニークで面白い人間だよ．僕はホモじゃない．君が一番良く知ってるはずだ．ホモじゃないが，男が男に感じる面白さって確かにある．彼はいったい，いくつだろう．昔はさぞかし美少年だっただろうな」
（PB39_00481『ナポリ魔の風』）

上記例（3）～（6）は「～タロウ」及び「～タダロウ」における名詞系文の用例である．これらの用例に基づいて名詞系文の構造をまとめてみると，次のような文のことを指していることが分かる．

名詞系文の構造
名詞系前接語＋判定詞＋推量形式

上記例（3）の「最後であったろう」を例にすると，「最後」はその前接語で，品詞は名詞のため「名詞系」に分類される．そして間に判定詞「である」を挟んで，推量形式「～タロウ」が続くという構造になっている．本稿は，例（3）

のような名詞系文を「～であったろう」と記す[8]．同様に，例（4）～（6）はそれぞれ「～であっただろう」,「～だったろう」,「～だっただろう」となっており，これらを合わせて考えると,「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文が合わせて四種類あることが分かる．これについて李（2020）でも指摘しており，四種類の名詞系文を表で改めて整理すると次のようになる．

表 2　「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の種類

	「～タロウ」	「～タダロウ」
「である」が挿入される場合	～であったろう	～であっただろう
「だ」が挿入される場合	～だったろう	～だっただろう

なお，名詞系文に分類するのは，例（3）～（6）のように前接語品詞が名詞の場合だけでなく，ナ形容詞（e.g.感無量），副詞（e.g.いかばかり），助詞（e.g.くらい），助動詞（e.g.べき）が前接語の場合も含まれている．これらの品詞の語が前接語となっている用例については，李（2020）を参照してもらいたい．

2.3　「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の使用傾向

前節では「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文はどういった文なのかについて，李（2020）を振り返りながら説明した．本節では，前掲李（2020）でまとめた結論Ⅰのうち，前接語が名詞系の場合，つまり「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の使用傾向について改めて整理する．

結論Ⅰ　前接語品詞について（再掲）
〈名詞型〉　「名詞」との間に「である」「だ」のいずれを挿入しても，
「～タロウ」＞「～タダロウ」
（李 2020:21）

繰り返しになるのだが，李（2020）においては,「～タロウ」と「～タダロウ」の名詞系文における用例の使用傾向について，上記の結論をまとめている．この結論を前節で説明した四種類の名詞系文に変換すると，

「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の使用傾向
「である」が挿入される場合：
「～であったろう」＞「～であっただろう」
「だ」が挿入される場合：
「～だったろう」＞「～だっただろう」

ということになる．

つまり，名詞系前接語と推量形式との間に，判定詞「である」と「だ」のどちらが挿入されても,「～タロウ」における名詞系文の用例が,「～タダロウ」における名詞系文の用例より多いことが確認できる．言い換えると，挿入され

[8] このように本稿は，推量形式を片仮名，形態による下位分類を平仮名で表記する．

る判定詞にかかわらず，名詞系文においては「～タロウ」の使用が顕著だということである．この使用傾向について李（2020）で挙げている用例数（表 3）を見ても明白である．

表 3　「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の用例数

	～であったろう		～であっただろう		～だったろう		～だっただろう	
	用例数	選好率	用例数	選好率	用例数	選好率	用例数	選好率
名詞	98	90%	11	10%	155	80%	39	20%
ナ形容詞	2	100%	0	-	6	67%	3	33%
副詞	1	100%	0	-	5	100%	0	-
助詞	1	100%	0	-	3	60%	2	40%
助動詞	2	100%	0	-	5	83%	1	17%
複数あり	14	100%	0	-	27	84%	5	16%
計	118	91%	11	9%	201	80%	50	20%

（李 2020:21 表 5）

3.「～タロウ」名詞系文の使用が顕著であることに対する仮説

現代日本語において，過去の出来事について推量する際，「～タダロウ」を用いるのが一般的である．それにもかかわらず，前接語が名詞系の場合になると「～タロウ」の使用が顕著になるということは前述したとおりである．それではなぜこのような傾向が見られたのだろうか．本節はこの疑問を解き明かすために，BCCWJ で見られた用例の分布を基に下記の仮説①～③を立ててみる．それぞれの仮説が適用されると思われる名詞系文の種類も下記通りである．

仮説①：歯茎破裂音による影響
適用される名詞系文の種類：「だ」が挿入される場合
仮説②：「ある」が前接する「～タロウ」動詞系文による影響
適用される名詞系文の種類：「である」が挿入される場合
仮説③：非過去推量形式「～であろう」の使用分布による影響
適用される名詞系文の種類：「である」が挿入される場合

次の 3.1 節～3.3 節は上記の 3 つの仮説について詳しく述べていくのだが，これらの仮説は BCCWJ における文学作品から収集された用例に基づいて下したものであり，事実上仮説が成り立つかどうかに関しては更なる検証をかける必要があると思われる．本稿は仮説を立ててみることで，これから検証していく方向にヒントを与えるものであることを理解してもらいたい．

3.1　歯茎破裂音による影響

本節は名詞系文においては「～タロウ」の使用が顕著である理由を音声面から考えてみる．前述のように，「～タロウ」と「～タダロウ」における名詞系文は四種類あり，その使用傾向は次のように表すことができる．

「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の使用傾向（再掲）
「である」が挿入される場合：
「～であったろう」＞「～であっただろう」
「だ」が挿入される場合：
「～だったろう」＞「～だっただろう」

そしてこれら四種類の名詞系文の発音に注目し，次の表 4 でまとめる．

表 4　「～タロウ」「～タダロウ」における名詞系文の発音

	「～タロウ」	「～タダロウ」
「である」が挿入される場合	～であったろう [deattarou]	～であっただろう [deattadarou]
「だ」が挿入される場合	～だったろう [dattarou]	～だっただろう [dattadarou]

上記四種類の名詞系文のうち，「だ」が挿入される場合，つまり「～タロウ」に分類されている「～だったろう」と「～タダロウ」に分類されている「～だっただろう」を比較してみると，「～だったろう」には歯茎破裂音が 2 つ連続して発音されているのに対し，「～だっただろう」には歯茎破裂音が 3 つ連続して発音されていることが確認できる．つまり音声面から考えると，「だ」が挿入されるこの二種類の名詞系文を実際に口にするには難しいと言えるのではないだろうか．そこで筆者は言語の利便性や経済性から，発音しづらい形式のなかから，比較的に発音しやすい「～タロウ」に分類されている「～だったろう」のほうがより選ばれやすいのではないかと考えている．
以上のことを仮説①としてまとめる．

仮説①　歯茎破裂音による影響
歯茎破裂音によって発音の難しい「だ」が挿入される名詞系文の中から，比較的発音しやすい「～だったろう」のほうが選ばれる．

前節で断っておいたように本稿では，仮説①の適用範囲は上記四種類の名詞系文のうち「だ」が挿入される場合のみだと考えている．そうしたのは「だ」に比べて，「である」には「あ」が挟んでおり，発音時はいったん[t]や[d]の調音点である歯茎から離れるため，連続性は「だ」ほどではないと思ったためである．
なお，仮説①は上記のように音声面から立てたものであるため，話し言葉あるいは文学作品の中の会話における用例にしか適用できないという局限性がある．今回収集されている文学作品における用例に限っても，会話と地の文を分けて検討する必要が生じてくる．

3.2　仮説②：「ある」が前接する「～タロウ」動詞系文による影響

「～タロウ」名詞系文の使用が優勢的に見られる理由について，音声面の視点から立てた仮説①について前節で紹介してきた．仮説①の適用される名詞系

文の種類は「だ」が挿入される場合であるのに対し，本節及び次節で説明する仮説②，仮説③が適用される名詞系文の種類は，「である」が挿入される場合である．

前述のとおり，李（2020）では，「～タロウ」と「～タダロウ」に前接する語の品詞によって BCCWJ における文学作品の用例を「名詞系」，「動詞系」及び「イ形容詞系」に分類している（pp.18-20）．本節で説明する仮説②は「～タロウ」において，動詞系文のうち，存在を表す動詞「ある」が前接する場合の用例分布は，「～タロウ」名詞系文の使用に影響を与えたのではないかと推測するものである．

李（2020）によれば，動詞系文は，動詞または補助動詞が推量形式に前接する文のことを指している（p.18）．例えば，動詞「ある」が前接する次の例（7）と例（8）がある．

(7) 「学園内のものと思われる電話番号があるんだけど，どこのか見当つかないんだ．職員名簿の後ろに学園の番号表が<u>あったろ</u>．それで見てくれないか」

（PB39_00420　『もう君を探さない』）

(8) 郁子は，座布団の上でお尻をモゾモゾと動かした．今の子供としては，郁子は正座することに慣れているが，それでも長くなると辛い．八幡の叔母さん―柳田靖江に言われて着た，グレーのワンピースが少し小さくてきついせいも<u>あっただろう</u>．

（PB29_00374　『怪談人恋坂』）

「～タロウ」と「～タダロウ」における動詞系文の用例数を前接する動詞・補助動詞別に数えてみると，両形式においてそれぞれ上位にくる動詞・補助動詞の用例数と選好率は，次の表 5 のようになる．

表 5　「～タロウ」「～タダロウ」における動詞系文の使用分布（一部）

前接語	前接語品詞	～タロウ		～タダロウ	
		用例数	選好率	用例数	選好率
行く	動詞	7	88%	1	13%
聞く	動詞	7	70%	3	30%
テクル[9]	補助動詞	11	61%	7	39%
ある	動詞	48	51%	46	49%
たつ	動詞	9	50%	9	50%
言う	動詞	42	47%	48	53%
いる	動詞	8	35%	15	65%
する	動詞	9	35%	17	65%
なる	動詞	13	32%	28	68%
考える	動詞	4	31%	9	69%
できる	動詞	6	30%	14	70%
テイル	補助動詞	56	24%	179	76%
見る	動詞	3	21%	11	79%
テシマウ	補助動詞	1	7%	14	93%

「～タロウ」と「～タダロウ」における動詞系文の使用傾向が，前接する動詞・補助動詞の種類によって異なることが上記の表 5 から分かる．そして「ある」が前接する場合に注目してみると，両形式における用例数がそれぞれ 48 例と 46 例となっており，拮抗しているということが確認できる．

動詞系文の用例は全体的に「～タダロウ」のほうが多いということを前掲結論 I で述べた．その中で，「ある」が前接する場合，全体と異なった傾向を呈しており，「～タロウ」の用例数が「～タダロウ」と拮抗しているとすれば，拮抗傾向の背後に何らかの理由があることがまず推測できよう．

そして，拮抗傾向にある「ある」の前接する「～タロウ」動詞系文が，形態的に「ある」の要素をもつ，「である」が挿入されている「～タロウ」名詞系文にまで，多かれ少なかれ影響を及ぼしたのではないかと筆者は考えている．言い換えると，「～タロウ」名詞系文「～であったろう」が「～であっただろう」より顕著に使用されている理由の一つとして，「ある」が前接する「～タロウ」動詞系文の使用傾向に引きずられていると結論付けられよう．[10]

これを仮説②としてまとめる．

---

[9] 「テクル」のように，表中の片仮名表記は前接語の品詞は補助動詞であることを意味する．それ以外の場合，前接語の品詞は動詞である．

[10] 表 5 を通して，「～タロウ」「～タダロウ」の用例数と拮抗している現象は，動詞「言う」が前接する場合も見受けられた（「～タロウ」42 例，「～タダロウ」48 例）．本研究の論点と直接関わっていることは証明されていないため，本論においての論述は省くことにした．

仮説②　「ある」が前接する「～タロウ」動詞系文による影響

拮抗傾向を呈している「ある」の前接する「～タロウ」動詞系文が，「～タロウ」名詞系文「～であったろう」の使用傾向に影響を及ぼした．

「ある」が前接する動詞系文の用例数が拮抗していることが上記で確認できたのだが，一方，拮抗傾向の背後の理由，つまり，なぜこのような現象が起きているのかということに関しては課題として取り残されている．なお，本稿の中心から離れることではあるが，上記表 5 から見られるように，「言う」が前接する動詞系文においても，両形式の用例数が拮抗していることが確認できる．過去推量形式の使用分布を明らかにするために，別稿をもって「言う」が前接する動詞系文に焦点を当ててみたい[11]．

3.3　仮説③：非過去推量形式「～であろう」の使用分布による影響

3.1 節では音声的な視点から「～タロウ」，そして 3.2 節では「ある」が前接する「～タロウ」動詞系文に注目して，名詞系文においては「～タロウ」の使用が顕著である理由について考えてきた．

本節は前節と同様に，「である」が挿入される場合，つまり「～であったろう」の使用が顕著であることに注目するのだが，視点を非過去推量形式においてみる．具体的には，非過去推量形式「～デアロウ」名詞系文の使用に注目して，仮説③を立ててみたい．

説明に先立って，過去推量形式と非過去推量形式について改めて整理する．過去推量形式に関しては 1 節でも述べたように，李（2020）では「～タロウ」と「～タダロウ」の二種類を挙げているが，これ以外に次の例（9）のように，「～タデアロウ」の形式をとる場合もある．つまり，過去推量形式が合わせて三種類あるということである．

(9) ふたりが期せずして落合って，それからどうしたのか．昼間の行きがかりから考えると，かれらはおそらく鐘の有無について言い争ったであろう．

（LBd9_00041『白髪鬼岡本　綺堂怪談集』）

---

[11] 「～タロウ」名詞系文「～だったろう」と「～であったろう」の使用が顕著であることを李（2020）及び本稿で確認している．そして本稿においてはここで挙げているように，「ある」と「言う」が前接する動詞系文「～あったろう」と「～言ったろう」の使用が「～タダロウ」の使用と拮抗していることも伺える．更に，イ形容詞系文「～かったろう」の拮抗傾向も前述のとおりである．これら 5 つの文のいずれにおいても推量形式の直前に促音があることが伺える．したがって，前接語品詞にかかわらず，「～タロウ」の使用が促音の要素の有無と関わっているのではないかと筆者は考えている．ただ，動詞系文における「ある」と「言う」が前接する場合以外の用例への確認は現時点で行われていないこともあり，より緻密な考察が必要だと思われ，今後の課題として考えていきたい．なお，「「～タロウ」名詞系文の形式はいずれも促音がある」というご意見を，2021 年 9 月 8 日で催された一橋合宿の発表時に聖心女子大学岩田一成先生から頂いた．

一方，非過去を表す推量形式，いわゆる非過去推量形式も三種類あり，下記の例（10）～例（12）が示すように「～ダロウ」「～（ヨ）ウ」「～デアロウ」がそれにあたる．これらの形式を整理したのが表 6 である．

(10) どちらが年上だろうか. 顔付きからして，卓也の方が上かもしれない．いや，ほとんど同じだろうと思う．四六時中一緒にいてやれれば，どんなに自分の気も楽になるだろう.

（PB29_00274『15 秒』）

(11) 吐月が言った“隠丹法”というのは，充分に，ソーマの精製法として考えられることであった．充分な量のソーマがあれば，色々と試すこともできようが，今，雲斎が有しているのは，ただ一本のみである.

（LBp9_00090『キマイラ』）

(12) 画像の中の，とくんとくんと動き続ける心臓を眺めながら，これから始めるであろうさまざまな波風のことは，今はまだ考えないでおこうと思った.

（PB29_00249『今夜誰のとなりで眠る』）

表 6　本稿における推量形式

非過去推量形式	～ダロウ	～（ヨ）ウ	～デアロウ
過去推量形式	～タダロウ	～タロウ	～タデアロウ

本節において上記非過去推量形式のうち，「～デアロウ」における名詞系文に注目して「～であったろう」と比較するのは，両者がともに「である」の要素のある形式だからである．仮説②において「ある」が前接する「～タロウ」動詞系文に注目したのも，このように形式上の類似性のある表現が，互いに影響を与えやすいのではないかと考えたためである．

では，過去推量形式における「～タロウ」名詞系文「～であったろう」が，非過去推量形式「～デアロウ」における名詞系文とどのように関わっているのだろうか．以下，表 6 で示した六種類の推量形式の名詞系文において，「である」の要素をもち，そして出現する可能性のある形式，及び BCCWJ の文学作品におけるそれぞれの用例数を表 7 でまとめる．

表 7　「である」の要素をもつ推量形式名詞系文

推量形式		「である」＋推量形式	用例数
過去推量形式	～タロウ	～であったろう	111
	～タダロウ	～であっただろう	10
	～タデアロウ	～だったであろう	11
		～であったであろう	15
非過去推量形式[12]	～ダロウ	～であるだろう	50
	～（ヨ）ウ	（なし）	（なし）
	～デアロウ	～であろう	138
		～であるであろう	1

表 7 から，「である」の要素をもつ推量形式名詞系文は，過去推量形式において四種類，非過去推量形式において三種類あることが分かる．そして用例数欄に注目してみると，過去推量形式「～タロウ」において「～であったろう」の用例数が 111 例で，非過去推量形式「～デアロウ」において「～であろう」[13]の用例数が 138 例となっていることが確認できる．つまり，「～であったろう」と「～であろう」が，それぞれ過去と非過去のグループにおいて，用例数の最も多い形式であることが伺える．

一方，過去推量形式において，「～であっただろう」，「～だったであろう」，「～であったであろう」などの形式も見られるが，用例は全て 20 例以下にとどまっている．非過去推量形式も過去推量形式の場合と同様に，「～であるだろう」「～であるであろう」の形式も確認できるが，用例数が少ないことが確認できる．

つまり，「である」の要素をもつこれらの推量形式名詞系文のうち，過去推量形式において用例数が最も多いのは「～であったろう」で，非過去推量形式において使用数が最も多いのは「～であろう」ということになる．つまり．両者の分布傾向が類似しているとも言えよう．従って，「～タロウ」名詞系文「～であったろう」は，非過去推量形式における「～であろう」との間に何らかの関係があり，両者が互いに影響を与え合っているのではないかと筆者は推測する．

これを仮説③としてまとめる．

---

[12] 非過去推量形式の用例を抽出する際に用いた検索方法は次である（最終検索日：2020 年 11 月 5 日）．BCCWJ の性格によって「～デアロウ」は「～（ヨ）ウ」の一種として扱われているため．両形式の検索方法が同じとなっているが．本稿では両者を別々の形式として扱う．

「～ダロウ」の抽出方法：「キー」指定しない、「後方共起 1 キーから 1 語」語彙素：だ＋活用形：大分類：意志推量形。

「～（ヨ）ウ」／「～デアロウ」の抽出方法：「キー」指定しない、「後方共起 1 キーから 1 語」品詞：大分類：動詞／形容詞＋活用形：大分類：意志推量形。

[13] 注 5 で述べたように，「～であろう」は推量形式「～デアロウ」の形態的な下位分類の一つである．これ以外に「～であるであろう」があることを表 7 で示している．

仮説③　非過去推量形式「～であろう」の使用分布による影響
非過去推量形式における「～であろう」の使用分布が．過去推量形式における名詞系文「～であったろう」の使用分布と類似しており．両形式が互いに影響を与え合っている．

ただ，上記のこのような分布についてたまたまそうなっているだけなのではないかという疑念もあるだろう．なお．仮説②と同じように，上記の両形式がいったいどのように関係しているのかについては現時点では突き止めておらず，それを明らかにすることを今後の研究に期したい．

4. おわりに

本稿は，BCCWJ を用いて文学作品における過去推量形式「～タロウ」と「～タダロウ」を比較した李（2020）の研究成果に基づき，名詞系文においては「～タロウ」の使用が顕著であることについて改めて確認したうえで，その傾向の背後の理由について下記仮説①～③を立てて説明した．

仮説①　歯茎破裂音による影響
歯茎破裂音によって発音の難しい「だ」が挿入される名詞系文の中から，比較的発音しやすい「～だったろう」のほうが選ばれる．

仮説②　「ある」が前接する「～タロウ」動詞系文による影響
拮抗傾向を呈している「ある」の前接する「～タロウ」動詞系文が，「～タロウ」名詞系文「～であったろう」の使用傾向に影響を及ぼした．

仮説③　非過去推量形式「～であろう」の使用分布による影響
非過去推量形式における「～であろう」の使用分布が．過去推量形式における名詞系文「～であったろう」の使用分布と類似しており．両形式が互いに影響を与え合っている．

一方，既に述べたように，本稿で提起したこれらの仮説に対して更なる考察や検証を加えていくことが今後の課題として挙げられる．なお，「推量形式の使用分布を明らかにする」という筆者の研究目的を果たすために，今回注目した「～タロウ」名詞系文のみならず，「～あったろう」や「～言ったろう」のような動詞系文や，今回の考察対象には含めきれなかった文学作品以外の用例（特に会話文での使用例），そしてより早い時期に用いられた推量形式の使用も，今後の研究の視野に入れたい．

参考文献

浅川哲也・竹部歩美（2014）『歴史的変化から理解する現代日本語文法』おうふう.
沖森卓也（編）（2010）『日本語史概説』朝倉書店.
沖森卓也（2017）『日本語全史』ちくま新書.
佐伯哲夫（1993）「ウとダロウの職能分化史」『国語学』(174), pp.16-27, 国語学会.
白岩広行（2015）「推量形式の用法の通時変化について―江戸・東京の文芸資料をもとに―」『上越教育大学国語研究』(29), pp.60-49, 上越教育大学国語教育学会.
白岩広行（2016）「確認要求は増えているか―江戸・東京の推量形式を中心に」『上越教育大学国語研究』(30), pp.111-99, 上越教育大学国語教育学会.
長井香奈子（2008）「「う」と「だろう」」『国文学　遠藤邦基教授古稀記念特集』(92), pp.329-354, 関西大学国文学会.
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
仁田義雄・益岡隆志（編）（1989）『日本語のモダリティ』くろしお出版.
仁田義雄・益岡隆志（編）（2000）『日本語の文法 3　モダリティ』岩波書店.
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4 部第 8 部　モダリティ』くろしお出版.
三宅知宏（2010a）「「推量」と「確認要求」―“ダロウ”をめぐって―」『鶴見大学紀要第 1 部日本語・日本文学編』(47), pp.9-55, 鶴見大学.
三宅知宏（2010b）「「不定推量」と「質問表現」―“ダロウ”をめぐってII―」『鶴見大学紀要　第 1 部日本語・日本文学編』(47), pp.57-75, 鶴見大学.
山口堯二（1991）「推量体系の史的変容」『国語学』(165), pp.26-37, 国語学会.
李　兮然（2020）「過去推量形『～タロウ』と『～タダロウ』の使用実態 : BCCWJの文学作品を資料として」『さいたま言語研究』(4), pp.14-25, 埼玉大学大学院人文社会科学研究科日本語専攻内 さいたま言語研究会.

辞書

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2000）『日本国語大辞典』小学館.
日本語文法学会（編）（2014）『日本語文法事典』大修館書店.

使用データ

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』（最終閲覧日 2021 年 10 月 11 日）

The Usage of Conjectural Expressions *Tarou* and *Tadarou* in Literature and Its Background:
Focused on *Meishi Kei Bun* in *Tarou*

LI Xiran

This paper is based on the research result of Li (2020), which compares past tense conjectural expressions *Tarou* and *Tadarou*, using sentences from literature that are collected from BCCWJ corpus. Firstly, this paper reconfirms the result that the use of *Meishi Kei Bun* (Sentences which preceding word of conjectural expression is noun or noun-ish) in *Tarou* is prominent, as Li (2020) concludes. Following that, three hypotheses are introduced as below to find out why the trend in the usage mentioned above could be observed.

Hypothesis 1
Effect from Alveolar Plosives: [t,d]
When *Da* is inserted between the conjectural expressions and its preceding words, *Meishi Kei Bun* in both *Tarou* (which refers to *Dattarou*) and *Tadarou* (which refers to *Dattadarou*) is difficult to pronounce due to the alveolar plosives: [t,d]. In this case, *Dattarou* is preferred because of its relatively simple pronounciation.

Hypothesis 2
Effect from *Doushi Kei Bun* Whose Preceding Verb of Conjectural Expression Is *Aru*
Doushi Kei Bun (sentences which preceding word of conjectural expression is verb or auxiliary verb) using *Tarou*, with the preceding verb of conjectural expression, *Aru*, affects the usage of *Meishi Kei Bun* using *Tarou*.

Hypothesis 3
Effect from the Use of Non-past Tense Conjectural Expression *Dearou*
The use tendency of non-past tense conjectural expression *Dearou* is similar to that of *Deattarou*, one kind of *Meishi Kei Bun* in *Tarou*. These two kinds of expressions have an influence on each other.

Keywords: Conjectural Expression, *Tarou*, *Meishi Kei Bun*, Use Tendency